

人類よ起ち上げれ!

ムーンマトリックス

[覚醒篇⑤] *Human Race Get Off Your Knees*
David Icke

爬虫類人はどこに潜んでいる? ~ 第4密度からの操作 ~

デーヴィッド・アイク
為清勝彦訳

我々の肉体は、宇宙の仮想現実ゲーム
つまり「宇宙インターネット」に接続されている肉体コンピュータ
に過ぎない。そこで我々は、科学、学問、教育、マスコミ
——すべて奴らの作った固定観念の世界につながれたままだ
——「根源意識」に接続を繋ぎ変えれば、
見えてくる世界は一変する!!



011

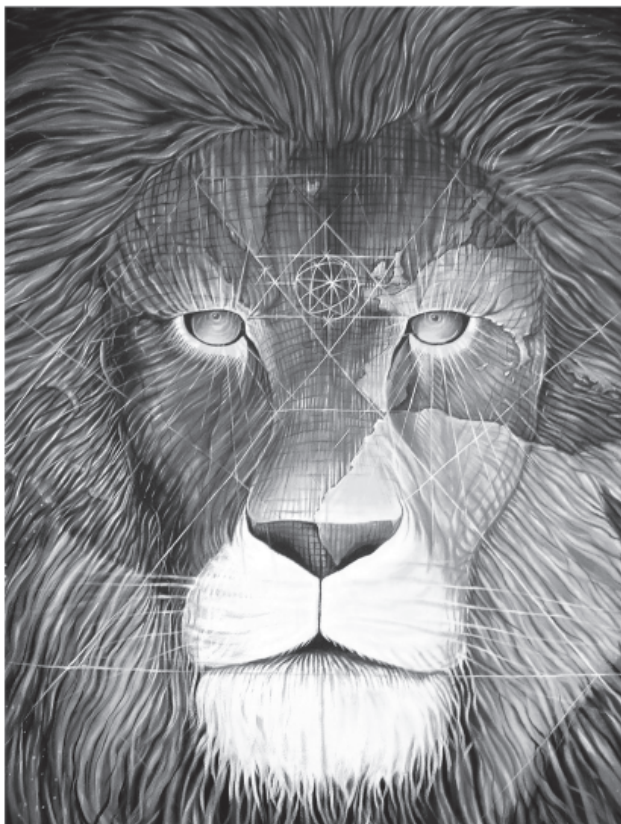
ムーンマトリックス「覚醒篇⑤」

デーヴィッド・アイク
訳為清勝彦

ヒカルランド

SAMPLE

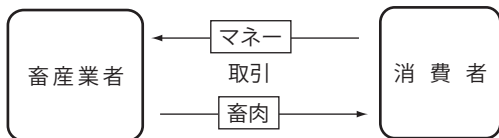
「地下」と「月」が問題だ！ 覚醒第5弾！



The lion sleeps no more.

爬虫類人も生きている

爬虫類人（神々）も生きるためには食糧が必要。
人間と同じように、食糧の確保に必死なのである。



飼育

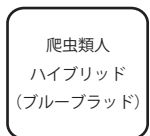
世界の家畜養頭数

牛 13億8224万頭 豚 9億4121万頭

羊 10億7127万頭 鶏 185億5500万羽

FAOSTAT(<http://faostat.fao.org/>) 2009年統計値

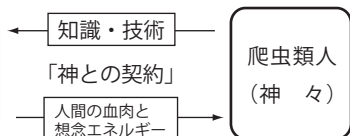
第三密度



支配
(権力)

地球の人口
70億人
(2010年推計)

第四密度



宗教信仰などを通じ、
人間の生け贄を提供させ、
想念エネルギーをかき集めてきた。

第四密度の爬虫類人にとって、彼らを代理する神に崇拜者たちの意識を集中させるように操る世界の諸宗教は、素晴らしいエネルギー源である。(第11章)

アセンション(次元上昇)すると・・・

太古の昔、人間が怖がるようになったためか、爬虫類人は身を隠し(神々が見えなくなり)、ハイブリッド人間(ブルーブラッド)を創造して人間の支配を代行させることにした。

↑(高い) 振動の周波数 (低い) ↓



↑
アセンション



映画『ゼイリブ』で、
テレビ塔からの信号が停止されると、
人間たちには突然E.Tの姿が見えるようになる。
(第19章)

いわゆる「アセンション」が次元上昇を意味するならば、我々の現実世界である第三密度の次元が上昇し、第四密度とオーバーラップすることで、見えなくなっていた爬虫類人が姿を現すことになるのではなかろうか。特に地球を支配している爬虫類人は、第四密度の中でも低層にいるため、真っ先にオーバーラップするだろう。

彼らの存在に気付いても人間が反乱することのないよう、世界政府による厳重な管理体制の完成(軍と警察力の集中)を急いでいると解釈すれば、現在の世界情勢も納得できるというものだ。

訳者 為清勝彦

各巻の構成

【第1巻】我々は通常、自分の身体やものの考え方、自分の名前などをもって「自分」と思っているが、実はそれは錯覚であるということ（第1章）、そして、アイクが1990年に覚醒の旅を始めるまでに辿った人生経験の必然性（第2章）、覚醒の旅を始めて以降、世間から大々的に嘲笑ちやうしやうされることで真の自由を得たこと（第3章）が記述されている。

【第2巻】第4章より、アイクが過去に行ってきた真実の解明の内容が、解明を行った順に（解明に導かれた順に）紹介してある。太古の「黄金の時代」の終焉しゆうえんをもたらした地殻変動（大洪水）の後にメソポタミアの地に出現したシュメール文明。それが、バビロン、エジプト、ローマ、ロンドン（バビロンドン）と変遷し、今日の世界支配ネットワークになった（第4章）。イルミナティの地球規模の蜘蛛くもの巣（ウェブ）、ピラミッド支配構造（第5章）。イルミナティの血筋の中核をなすロスチャイルド家とその金融支配の窓口（第6章）。「ユダヤの陰謀」と言われるが、ユダヤ人はスケープゴートに過ぎない。陰謀を巡らしているのはロスチャイルド・シオニストである（第7章）。

【第3巻】人類支配の基本テクニクである①PRS（問題を作る↓人々に反応させる↓支

配に都合のよい解決策を実施)、②全体主義者の忍び足について、9・11事件、地球温暖化詐欺などをケーススタディにして解説(第8、第9章)。

【第4巻】人間の基本的な行動や感情を支配する爬虫類脳。現在の人類は爬虫類人の遺伝子操作によって創造された(第10章)。世界各地の古代神話・伝説・信仰に共通する蛇崇拜は、現在の悪魔崇拜やさまざまなシンボルとなって受け継がれている(第11章)。

【第5巻】言語に暗号化されている蛇の人類支配を言語学の視点で分析(第12章)。爬虫類人はどこに居るのか?(地下世界、変身のことなど)(第13章)。月は、自然の天体ではなく、工作された宇宙船である可能性を検証(第14章)。

【第6巻】アマゾンの熱帯雨林で聞こえた「声」のメッセージ。愛だけが真実であり、他は何もかも錯覚だった(第15章)。人体をコンピュータにたとえ、宇宙をインターネットにたとえるアイクの宇宙論(第16、17章)。時間と空間という錯覚(第18章)。

【第7巻】月のマトリックス。月からの人類支配の仕組み(第19章)。

【第8巻】ゲーム・プランⅠ人口削減と心身への攻撃(第20～22章)。

【第9巻】ゲーム・プランⅡ世界政府と自由の剝奪(第23～25章)。

【第10巻】ゲーム・プランⅢ社会福祉の正体(第26～28章)と結び。

第12章 エンコード 暗号化された真実

蛇人種は暗号と象徴で人類を誑かす 監視者 コード シンボル 征服する 16

こんには、水兵さん——蛇たちのお好みは海軍用語 「天の船」「上の海」キリシタ、ロトシラフ、 20

「天使たち」とは誰か？——蛇、蛇、蛇 漁獲犯 暗号者 ヤハウエ 24

蛇の聖職者「サービアン」はアモン(アーメン)を拠点に 兵艦軍 星の人々 パビロンとテーベ 蛇の神の名 32

ソダリスト、サウド、黒い貴族、ソシアリスト、ザドク派、メセー、サドカイ派 秘 密 黒い 寡頭勢力 フェビアン協会 監視者 救世主 エツセネ派へ 37

カプトルで通底——キャピトル・ヒル、バフオメット、ゴルゴダ、モサド、ナチス 頭蓋骨 米国会議事堂 山羊の頭 イエスの標 子供に危害 ヌザヤ祭司長 40

生け蝮・蝮血が身上
蛇は姿を変える——モロク、トカゲ、パン、梟、竜、鷹、ジャツカル、不死鳥、鳩、鷲

「神との契約」——相互交配（混血）と人間の子供の維持条約

51

降伏条約の一つ——ハイブリッド血筋体制の維持条約

58

「選ばれた民」と「神」との「契約」

64

全て蛇絡み——アダム、エデン、アトランテイス

66

火星人が来ていた——「赤い人」アダム

76

第13章　それで、彼らはどこにいるのか？

爬虫類人は「秘密の玄関」で次元間移動する

80

人間を常食する爬虫類人

83

地下にある「地獄」——地下基地と洞窟都市は貫通している

86

瞬間移動で火星の地下基地のプロジェクト会議に出席

91

巨大な地下には寄生虫！地表宿主を搾り食す！
ニューヨークは世界最大級のドラコの巣 97

アガルタ、シヤンバラ、キガル（職人）、ヘル、ガラ、バズ、門神、河童
地下世界（地獄）を古代人は知っていた 100

「エイリアン」は下層の心（マインド）を誘拐する 102

妖精、ナীগカ、蛇、エルフ（小人）、蛙の手
地下世界の爬虫類人のことが民話には充滿している 103

取り替えて
変身者（シェイプシフター）——人間コード維持には吸血 107

アランテイスの祭田王「影の存在の子供たち」が現実を操っている！
トートのエメラルド・タブレットの暴露 110

露骨なフルーのCM「僕たちはエイリアンだから、いつもこうなんだ」 114

第14章 宇宙船「月」

さすがアーウィン、シヤピロの卓見！異常現象の月が人工物ならありうる！！
「月は観測エラーだ。月は存在しない」 120

「驚かない。地球、月、太陽の動きを
異常なまでの「偶然」——「巨石ヤード」の暗号 126

空洞の月——「鐘のように鳴った」月着陸船の衝突音 131

月は知性体が絶妙に建造した太古宇宙船エイリアン

134

豊富なチタン、損傷修復装置、物資貯蔵、月の裏側の隆起、水蒸気爆発e.t.c
月が完璧な人工物であるこれだけの理由

138

爬虫類人の月での活動には金が不可欠!
で、フォートノックスのタンクステン金塊の謎が解ける

141

宇宙征服のための「死の星」
天変異変系事し 大岩の衛星フォボス

144

古代の証拠——爬虫類人と月の到来で地球は別世界に!
月は「神々」の「戦車」 美しく穏やかで瑞々しく緑の茂った環境が大惨事!

151

「月以前」の時代を伝える民話
先任職を主張するプロセレネ人、モズセ族

157

「人間はオリオン座から」——ムバララツアニが「エデンの園」!
「超巨星」ベテルギウス 両性具有の「赤い世界」 道敷され纏の王冠

158

「神々」の痕跡——テイアワナコの建造
地球外の存在の碑文も! 100、150トンの巨石

161

月面の構造物、UFO、地球外生命体
鏡ドームオペリスク

163

ウルフ軍曹は月の「暗黒面」にある「エイリアンの基地」の画像を見た!
裏面 実際は内部への入り口

167

「ムーンスター」——月は次元間ポータル
モンスター(怪物) 爬虫類御用連出入り口

170

月面着陸の嘘——月の真相を隠すためのトリック映像
アポロ計画 承知で逃げ負ったスタンリー・キューブリック

173

宇宙船である月は、想像を絶する戦闘と破壊に関わっている
惑星一つ

178

コラム 日本の「爬虫類神」
レプティリアン

レプティリアンはすぐそこにいる	182
この「事実」をどう説明する？	184
縄文土偶と人類創造	186
縄文土器に秘められたDNA暗号	193
水田の風景は日本の伝統なのか？	197
前方後円墳と水利事業	201
日本文化の根底にある蛇の神	210
竜と蛇	218
生け贄	229
食べられる快感 <small>エクスタシー</small>	242

対立軸はどこにある？

248

良い爬虫類神、悪い爬虫類神——「水戸黄門」的レプティリアン解釈

258

蛇に秘められた原初の謎

262

故郷への帰り道を示す標識——性愛とクンダリーニ

268

アイクに20年先駆けたレプティリアン説？

276

●凡例 本文中（ ）内は訳者註釈。

校正 麦秋アートセンター
編集協力 守屋汎

第12章

暗号化された真実

英知は言葉そのものには存在しない。
英知は言葉に込められた真意である。

ハリール・ジブラーン

監視者 コード シンボル
蛇人種は暗号と象徴で人類を誑かす 征服する

本書を執筆している間にも、私の人生における共時性シンクロニシティが何度も繰り返し発生した。絶妙なタイミングでパズルのピースが私に届けられるのだ。その典型例が、アーティストのニール・ヘイグからの電子メールで、それに添付されていたのは、まだ公表されていなかった彼の友人ピエール・サバク（ペンネーム）の作品だった。サバクは、「比較言語学者・シンボロル学者」である。

私は欧州と米国を講演ツアーで回りながら、ピエールの本を読み、この章を書いた。その情報は実に興味深く、事実の裏付けとなる内容であることが分かった。『現実の殺害』は、いかにして蛇人種とその人類征服が、古代の言語と文書に暗号化されたかを示す、単語の派生・関連性・真意を研究したものである。そうした単語と意味が「現代の言語」に受け継がれている。サバクは、私が本書で明かしている陰謀の主な内容を暗号として含む、相互連動した単語と意味を解明するため、およそ7年を費やして辞書や文書を詳細に調べた。以下のようなポイントである。

・人類を支配している蛇人種（神々）は、「大洪水」に象徴される地殻変動に関与してい

る。

- 歴史を通じ、王族とハイブリッド血筋は根本的につながっている。世界を支配する「イブ」の血筋と蛇人種。「イブ」は、「生命」^{ライフ}と「蛇」^{スネーク}と同義語。
- 「輝ける者たち」(ラテン語で「イルミナティ」は「エンライトメント」と同じ意味)とあるように、蛇人種と「光」^{ライト}、「照」^{イルミネーション}「明」のつながり。古代文書で、蛇の「神々」、「墮落した天使たち」が「太陽のように」輝いていたと記述されていることは、先述した。彼らが作り出した太陽と月のシンボル、そして諸宗教は(少なくとも部分的には)これら天体の「光を出す」性質に起源がある。
- 蛇人種は「監視者」として知られていた。そのためイルミナティの「全てを見通す目」のシンボルがあり、ドル紙幣、クレド・ムトウワの神秘のネットワーク、エジプトのラーの目など、さまざまな装いで存在している。
- 「光をもたらず者」のテーマ。これが「ルシファー」と金星の名称となった。蛇の「神々」も、星(星の人)にシンボル化され、山羊の頭、雄羊の頭のシンボルと関連している。
- 蛇人種は各種の鳥でシンボル化される。梟^{フクロウ}、不死鳥^{フェニックス}、鷲^{わし}、鷹^{たか}、隼^{はやぶさ}、鳩など。有名な例が、中米の「羽毛の生えた蛇」の神、ケツアルコアトル(マヤの人々はククルカンと呼

ぶ)である。

・蛇人種と火のつながり。火を吹く竜、ギリシャのサラマンドラ(火トカゲ)など。
・飲血と「神々」への人間の生け贄(いへ)のテーマ。経血を飲むことが、しばしば魚(月経の魚)に象徴される。

・人間から爬虫類の姿への変身のテーマ。

・選ばれた者だけに解読されることを意図されている象徴体系に身を隠し、嘘つき、詐欺師(さぎ)、強姦犯として描かれた蛇人種。

・五芒星形(ごぼうせい)、悪魔崇拜のシンボル、「竜」としての「悪魔」のテーマ。爬虫類人種は、「シヤタニ」「サタニ」として知られていることがある。これはギリシャ語で「テイタン」(集合的に「タイタン」として知られる巨人の人種で、「墮落した天使」の一種)。

・選ばれた代理人(ハイブリッド血筋)に発達した知識を与える蛇人種という持続的なテーマ。それに付随する記述として、「話術者」としての蛇人種(ホピ族の伝承の「話術者」(トールカ)を想起されたい)。

「話術者」が出現する理由の一つには、「天使」という言葉がもともと「伝達者」(メツセンジャー)を意味し、蛇人種が人間の代理人に情報を伝えていたことがある。宗教上の英雄が「天使」の訪問を受けるというテーマが普遍的に存在することに注目すべきである。聖書の聖母マリアも、コー

ランのモハメッドも、「ガブリエル」という同じ「天使」の訪問を受けたと言われている。モハメッド自身が「メッセンジャー」として知られている。

だが、「話術者」のテーマには、もっと深い理由もある。爬虫類人は、現在の形の人間の言語を導入した。それ以前は、ほとんどの通信はテレパシーでなされていたが、「神（神々）」が人間を分断するために異なる言語を与えたという話が世界中のあちこちに存在する。聖書のバベルの塔の話が最も有名であるが、基本的に同じ話が世界中にある。これは言語を導入した蛇人種のことを象徴している。言葉は振動場であるが、爬虫類人は、会話（我々が言語と呼んでいる振動の通信）を導入して操ることで、大部分の人間の認識をプログラムした。いみじくも、「ラテン」という言葉は、「隠された」「秘密の」を意味する言葉に由来し、さらにアラブの「ラト」（覆い隠す^{おほ}という意味）から来ている。まさに言語は、人間をプログラムするための秘密のヴェールである。ピエール・サバクは書いている。

言語の実体は、文献学〔言語〕と同音異義語の研究を通じて濾過^{ろか}されたシンボルに現れる。姿を隠した人間の指導者、オカルトの言い伝えに登場する天使とは、影の主人もしくは王と識別される爬虫類人のことである。言葉と数学を教えた竜は、主としてその知識を、数字を並べたコードに埋め込んだ。これは、数学、幾何学、天文学、記号学、

言語の中に覆い隠された秘密の歴史である。体系的かつ知能的な記号の採用により、蛇とその隠蔽いんぺいに関する秘密知識は散漫になる。人間に対する不信から、蛇はオカルト儀式の背後に隠れた。発見されることを恐れた蛇は、戦争、政治・経済的な圧力をかけて諸民族を競争させた。古代文献は、蛇が、その計画と人間との取引において二枚舌だったことを示唆しきしている。

どれほど広範に蛇人種とその人間支配の証拠が存在するかを知るには、暗号コードを解明する必要がある。爬虫類人は必死になって隠れたままでいようとしているため、鍵を開け、「覆い」となっている暗号、シンボル、言葉、数学を解きほぐしていかなければならない。その覆いは厚く、ちよつと見ただけでは蛇人種とは何ら関係なく見える言葉の中に隠されている。

こんにちは、水兵さん——蛇「天の船」「上の海」たちの好みは海軍用語キングシップ、ロードシップ、エレ

ピエール・サバクは、蛇の神々が海軍用語で表現されていることを示している。例えば彼らの航空機は「天の船」と記述されており、オシリスやラーなどのエジプトの神話の中に、これに類似した航海のテーマを見出すことができる。エジプトのテーベの聖職者は、空のこ

とを「上の海」と表現し、神々を運ぶ太陽の船のことを語っている。爬虫類人のことを記述した言葉には、しばしば「水兵」もしくは「乗組員」という意味が込められていることがあり、「天使の群れ」とも呼ばれている。

サバクによると、文献では、「群れ」^{ホスト}のことを「水兵」、「放浪者・遊牧民」、「異邦人」^{エイリアン}と記録しており、それは「破壊者」、「強姦犯」、「略奪者」^{りやだつしや}と呼ばれていた「蛇」もしくは「両生類」として登場する。今日の世界的な法律制度が海事用語と海事関連に基づいていることについては後述するが、これが、「キングシップ（王政）」、「ロードシップ（君主の地位）」、「シチズンシップ（市民権）」、「リレーションシップ（結び付き、血縁）」、「メンバーシップ（会員制）」、「ワーシップ（崇拜）」など、多くの言葉の末尾に「シップ（船）」がある理由である。

現代人に与えられた名称の「サピエンス」も、このテーマに関係しており、極めて重要な暗号である。サバクによると、これはラテン語の名詞「セルペンズ（蛇、竜）」に由来しており、これはヘブライ語の「サパン（船員）」とも関係している。またサバクは、「バイブル（聖書）」という言葉は「ビブロス（ボート）」にさかのぼることができることを示し、「レリジョン（宗教）」という言葉はラテン語の動詞「レリガレ」（ボートを係留する）に由来すると言っている。

これと同じこと（ボート、蛇、聖書の関連性）がアラビア語とヘブライ語にも見受けられる。コーランは、神について「神の印の中には船があり、浮かんだ山々のように航海する」と述べている。今日でも我々は「宇宙船」という言い方をする。また、サバクの研究では、「バアル（主）」という名前の起源をアラビア語の「バハル（海）」から生じた「バー・ハー（水兵）」に求め、宗教の洗礼と入浴の儀式は、蛇の「神々」とシンボルの航海の関連から生じているのではないかと示唆している。彼は書いている。

闘争を擬人化した（「ヘブライの」）「ツアバオアス（乗組員、蛇人種）」は、水兵として描かれたオシリス神の系統を歴史的に辿^{たど}って追跡できる。オシリスのボートの崇拜は、宇宙船（スターシップ、スペースシップ）を峻^{しゅん}別^{べつ}する（ワーシップ⇨崇拜を通じて典礼的に再現される）。教会は、王と統治に分類されるボートとして図式的に配置される。古英語の名詞 *weorthscipe* が、現代の慣用句の *worship*（崇拜）に音訳された。 *worth*（価値）と *ship*（船）の合成語を書き直したものである。 *scipe*（船）は、ギリシャ語の名詞 *skaphos*（ボート）の指小辞^{ししよじ}であり、艦長（*skipper*）と船（*ship*）で納得できる。

フリーメイソンの神殿の外壁に帆船の絵があるのをよく見かけるが、これも同じシンボル

思想である。サバクは、地球上で爬虫類人の司祭として機能している秘密結社に關係の深い複数のキーワードを興味深く結び付けている。彼は、蛇とその司祭職の結合が「普遍的に達成」されたとし、それがローマ語とセム語にはつきり現れていると言う。ラテン語で「ブラザーフッド」を意味する言葉は、アラビア語の「邪悪な悪魔 (ifrit/afreet)」という分類から派生した「友愛 (fraternity)」である。さらに ifrit は、アラビア語の ifritar (詐欺師) と Ifrit (詐欺) に由来し、ラテン語の fratrar (兄弟)、蛇の知識の守護者となつたと言つたとサバクは論じている。この詐欺と詐欺師のテーマは、蛇人種の隠れた支配 (これは類似の言葉で頻繁に記されている) とそれを執行している秘密結社のことを示している。Ifritar は現代ギリシャ語の「フイーデー」(蛇) になつた。「メイソン」という言葉も、明らかに「建築者」と關係があり、これは蛇人種を意味する暗号として使われる言葉である。サバクは書いてゐる。

伝統的に赤い蛇で表現される建築者は、二重語法で「芸術 (ザ・アーツ)」と言われ「魔法の船」と相互に關係している。バビロニアとウバイドの偶像では、赤い蛇は、セイリムと「エイリアン (ザリ)」の祖先の山羊と魚と同じ扱いである。こうしたカテゴリーは、「月経の魚」もしくは「毛の生えた蛇」(人間と天使の混血) の変形である。

聖職者の伝承は、建築者（天使）というモチーフを魚と蛇と合成しており、これはアラビア語の言い回しに要約されている。そのため、例えば、「チバン（うなぎ）」は「タバ（蛇）」と関係している。また、「バナ（建築すること）」という動詞の語幹からして、これは爬虫類が「建築者」であることも暗示している。ユダヤ教の伝承は、「バナイ（建築者）」を、ヘブライ語の語彙に「レバーナ」として存在する「月」に結び付ける。

爬虫類の「建築者」と月の結び付きは、後で述べるが、完全に本質を捉えている。フリーメイソンは、「偉大な建築士」（やはり建築者の暗号）を崇拜するが、これもまた月の本当の性質を考えると、極めて意味あることである。秘密結社ネットワークの最上層部は、こうしたシンボルが意味することを全て熟知しており、全ての大規模な秘密結社、そして小規模な秘密結社の大部分は、（ごく内部のメイソンしか知らないが）一体化した蜘蛛の巣を形成している。

「天使たち」とは誰か？

強姦犯 略奪者 ヤハウエ
蛇、蛇、蛇

蛇人種のことを「墮ちた天使たち」と表現する例は、聖書に限らず、古代の文献に広く見



図134 天使（特に堕ちた天使）は爬虫類人を意味する暗号。



図135



図136

バビロニアの月の女神セミラミス（イシュタル、リリス）および太陽神ニムロドは、いずれも「天使」のように翼のついた姿で描かれている。

られる。例えば、ローマ語の「アンゲロス（天使）」は、ラテン語の「アングイス（蛇）」に由来し、これは「アングリー（怒り）」の語源でもあるとサバクは言う。

「神々」と女神たちは、いつも翼など飛翔能力を備えたものとして描かれていた。

天使は、翼のついた人間として描かれ、しばしば微笑ほほえんでいるが、これは本当の姿を覆い隠したものである。バビロニアの伝承で、生け贄となっている子供たちに向かって微笑んで（顔を歪ゆがめて）いる天使が描かれているのは偶然ではない。ヘブライ語の「顔を歪める（ハアヴァヤ）」という言葉は、アラビア語の「毒蛇（アフア）」と結び付いている。ヨーロッパの伝承で「残忍な刈り取り者（グリム・リーパー）」と言われる微笑する神も、蛇人種のシンドルの一つである。サバクが指摘するように、蛇（snake）の頭文字であるSを加えるだけで、「笑こ（laughter）」を「虐殺（slaughter）」に変えることができる。古英語でSは「神」（蛇の神）を意味する接頭辞だった。

堕ちた天使は（爬虫類人の常であるが）厳格に階層に分化していた。「アーチ」はギリシヤ語で「族長」を意味する「アルケ」に由来しており、これが「アーチエンジェル（大天使）」もしくは「主の伝言者」つまり、爬虫類人の「大いなる存在」の伝言者となった。「アーチ」は、シリア語の基語で「ハカ（話すこと）」に関係しており、ジャーナリストを意味する俗語の「ハック」はここに由来している。サバクは、「アーチ」の意味についてこう述

べている。

エジプト語の語幹の *arg* (くねくね動く、巻き付ける) と *akh* (輝く) は、バビロニアの題詞 *acan* (輝く蛇) に通じている。*akh* は、秘儀的には、アラビア語では「光を受けた者」を表現する名詞の *akh* (兄弟) として採用され、*acan* (輝く蛇) の側音である。現代アラビア語で動詞の語幹の *akh* は、*haqq* (真実) という語への付加語であり、「支配者」の意味である *hakim* と *luminary* (光り輝く、指導者) と常に併用される。さらにヘブライ語では、*akh* は接尾辞として *mal'akh* (輝く王を意味する「天使」という語に使われている。

聖書の神々の名前「エロヒム」は、「光」を意味する *eloh* に由来する。「アーチ」はさらにラテン語の *archus* (アーチ、曲線の意) と結び付いており、円は爬虫類もしくは竜のシンボルである。サバクは、ヘブライ語の *ga'al* (円) は、アラビア語の名詞 *gail* (悪魔) と同等であり、ペルシャ語の副詞 *Pain* (周囲に) は、「ペリ」と呼ばれていたペルシャの「蛇人種」に関係していると指摘している。

円というテーマは、空飛ぶ蛇の円盤のシンボルとして見受けられる。蛇人種が円と星によ

って象徴されていることを考えると、12の星が環状に配置されたEUの旗やアメリカの国旗の星も重大な意味を持つてくる。サバクは、古代の聖典が「天使たち」のことを「強姦犯・略奪者」として扱っていたこと（聖書のネフィリムのように）を解説し、侵略軍になぞらえている。侵略軍＝「群れ (host)」という語は、「神聖 (holy)」と関連している。ヤハウエやバアルなど古代の神々は、「群れの主」という称号を与えられ、これは「蛇」と同一視されていた。

サバクは、古代シリア語における蛇と「ヤハウエ」という「神」の名を比較する重要な考察をしている。その言葉の意味は、ヤハウエを蛇として描いており、「シャダイ」（ヤハウエの別名）のテーマとまったく同一であるという。「シャダイ」という名は、「シエド」（悪魔）から派生したもので、ウバイドの小像では蛇（蛇のような存在）として表されている。これは、爬虫類人を多次的とし、古代のセム語の名詞 *den*（蛇の意）に由来する *Jim* または *Jim* と表現しているイスラム教の伝承でも同じであるとサバクは指摘している。ヒエログリフではコブラであり、*U* または *U* と翻訳される。本書ではすでにこのテーマを論じてきたが、私が長年主張してきたこと（全ての宗教は蛇の「神々」の崇拜を基盤としていたこと）の証拠がますます揃いつつある。

サバクは、エジプトとアッカドの *Dj-En* は「蛇である主人」を意味し、*Dj-An* は「天の

「蛇」を意味すると言っている。極めて重要なことだが、「遺伝子 (gene)」という言葉も、セム語の *qen* に由来しており、アラビア語の *Jinn* (蛇) とシリア語の *jins* (性) と *jinsi* (性的) の間にも明らかにつながりがある。米国内の主なイスラエル・ロビー団体に JINSA (安全保障問題ユダヤ研究所) があり、これは「イスラエルとその安全保障を米国の外交政策の核心に据えるためのシンクタンク」である。子ブッシュ時代の JINSA のメンバーは、ディック・チェイニー、ポール・ウォルフowitz、ジョン・ボルトン、ドヴ・ザクハイム、リチャード・パールなど、ネオコン派閥の錚々たる指導者たちだった。彼らがアフガニスタンとイラクの侵略に深く関与していた。コーランの章は *sura* と呼ぶが、サバクによると、この語は、ギリシャ語で *saura* (トカゲ) に置き換わった堕ちた天使のテーマと関係しているという。「慈悲の主」と題された第55章 (*sura*) の 31〜33 節には、*thaqal* (強大な軍隊) のことが書かれている。

我々は、二つの巨大な軍隊を手配するだろう。(略) ジン (*Jinn*) と人類よ、天と地の諸地域を通り越していけるなら、そうせよ。我々の許可なく通過できはしないだろう。

こうした古代文献と暗号化された言い回しからは、何らかの戦争の後に人類を奴隷化した

蛇人種のこと、そして、人間の姿をした代理人を介して影から秘かに管理されている監獄国家としての地球のことを述べているとの印象を全般的に受ける。サバクの言語研究は、蛇人種、堕ちた天使、「王家」の血筋（ハイブリッド）のつながりを裏付けている。彼は、「統治者の血筋は、蛇（堕ちた天使の人種）を介して〔遺伝子が〕複製された人間と天使の混血の家系であることを重視する」と述べている。

この「裏切り者の集団」はラテン語では *serpentigena* と呼ばれ、これはそのまま「蛇の種族」あるいは「蛇の子孫」と翻訳できる。サバクによると、これはユダヤの伝承で *serpentigena* という堕ちた部族として偲しのばれており、星または竜に「形態化」されたという。爬虫類人と王族のつながりは至るところに存在する。古代ギリシャの *basilikos*（王家）は、*basiliskos*（蛇）から *basileus*（王）になった。こうした「王家」と「蛇」の関連性を示す言葉は世界中にある。サバクは書いている。

アッカド語とサンスクリット語の称号 *peor*（蛇）と *pala*（王）は、ペルシャ語の名詞 *mar*（蛇）と *mal*（指導者）に相当しており、これはギリシャ語に翻訳され、*basiliskos*（蛇）から *basileus*（王）になった。*basiliskos* は、ギリシャ語の称号 *basikanos*（魔術師）の語源である。さらにギリシャ語では、王族のことを *hemitheos*（半神）と言っ

まさに「半分が神」（人間と天使の混血）であり、helminthos（寄生虫）をもじったものである。ギリシャの聖史劇では、hemitheosはdioskouros（太陽神）という称号で呼ばれるが、これはdiosauros（爬虫類の神）の暗号化された言い方である。

蛇の神々のシンボルは、そのハイブリッドである「王族」のシンボルとしても採用されている。例えば、爬虫類もしくは「竜」（監視者）の円と目のシンボルでインド・ヨーロッパ語族の皇帝は表現されている。古代の英雄、王、支配者には、爬虫類や両生類に関係した誕生話が多いのはそのためである。アレキサンダー大王は、軍隊を率いて、エジプト、メソポタミア、トロイを征服し、さらにインドに向かい、バビロンで紀元前323年に33歳で死去している。アレキサンダーは、「蛇の息子」と呼ばれており、エジプトで建設したアレキサンドリアは、「蛇の息子の都市」として知られていた。ここでも同じテーマの反復が見られる。伝説では、アレキサンダーの父は蛇の神「アモン」（隠れた者）となっており、これは同じ素性を持つメロヴィング王朝の創設者メロヴィーの話とそっくりである。

征服軍
蛇の聖職者「サービアン」星の人物々はアモンバビロンとテーベ（アーマン）蛇の神の名を拠点に

爬虫類人ハイブリッドの血筋と、地球規模の秘密結社ネットワーク（蛇人種のエリート聖職者たち）の最高レベルで保持されている秘密知識に関して、私は何年も述べてきた。この聖職者たちの拠点は、古代の中東とメソポタミア（特にシュメール、バビロン、エジプト）にあったと特定できる（ただし、我々の認識する時間的には、さらに前の時代にさかのぼる）。悪魔崇拜のネットワークや相互につながった秘密結社の大親方（グラランド・マスター）や高位の構成員は、この古代の神殿や秘教学派の蛇の聖職者の現代版である。

サバクが行った言葉の研究も、このテーマを裏付けている。彼はメソポタミアに定住した「ノアの人々」であるサービア教の聖職者が何百年も辿った道を追跡した。サバクによると、「サービア教」（サービアン）は、英語で一文字違いで「フェビアン」になるが、Sabaia（星の人々）という言葉から「星の人々」という意味に解釈できる。サビの聖職者は、軍隊^{ホスト}と蛇に一致すると彼は言う。イスラエルの星（ロスチャイルド家のシンボル）は、「光の子供たち」（サビ人）と関係しており、星と杖（王権）はその血筋のシンボルである。サバクは述べている。

セム語の伝承では、蛇は「征服軍 (tsabaoth)」として描写されており、この語は、現代ヘブライ語の名詞 saba, s'baot, sabaoth から来ている。言語学的には、tsabaoth は、

tsavat (乗組員) から派生しており、厳密には「船舶の乗組員」に特定される。ユダヤの言い伝えは、tsabaothのことを明確にsaba (星、軍団) を表す「ボートの軍団もしくは海軍の巡回者」としている。

言語面の研究からは、特にバビロンと、エジプトの「テーベ」と言われた都市(アモンの都市)の聖職者が際立ってくる。「アモン」という神は、他にも「アモン・ラー」、「アツム・ラー」、「アーメン」などと呼ばれ、バビロニアのニムロド・タンムズの異形である。キリスト教とユダヤ教では、毎度の祈りの終わりに、この蛇の神の名前「アーメン」を唱えている。サバクが行った言葉の関連付け、意味、派生の研究は、「オシリス」、「オアンネス」、「バアル」、「ヤハウエ」として知られる神々を的確に一つの存在に結び付けたが、さらに世界中の多くの神々を加えることができるはずである。

彼は、アツカド語、アラビア語、エジプト語の語彙が似ていることは、「蛇(天使)の神格化は、太陽神アツムに匹敵することを示唆」していると言う。サバクによると、バビロニア帝国を築いたのはハムラビ王と呼ばれたが、これは「アマンの司祭^{ラビ}」と解釈でき、直訳すると「隠れた西の聖職者」になる。そして、バビロンと、テーベの聖職者は、テーベ(紀元前2060年から紀元前1085年までの間に3度エジプトの首都になった)まで拡大して

いたハムラビの王国と根底からつながっていた。

「テイベン」(テイベ人)は、アラビア語の *taban* (蛇) とエジプト系アラビア語の *teaban* (コブラ) に由来している。テイベ人を意味するラテン語の *Anguigena* は、「蛇の子孫」という意味である。蛇人種とそのハイブリッド人間の「秘伝を受けた者」の関係は、いずれも「学生」を意味する *talib*, *taliba*, *taliban* という語に見受けられる。ローマの古典を著したプリニウスなどによると、バッカス(ギリシャ版のイエス)は、「テイベの統治者」であり、「ゼウスの息子」(ギリシャ語で *dioskouros*) と呼ばれており、これはサバクによると、*diosauros* (爬虫類の神) を謎めいた言い回しにしたものだという。

サバクは、言語学を使い、(バビロンの聖職者とともに) テイベの聖職者がローマへ、さらにロンドン(新たなローマ、新たなバビロン)へと移ったのを追跡している。サバクは書いている。

古代秩序においてテイベの政府は、コブラの王冠(秘かにシリアと合意した意匠)(略)と *Amun* の名詞句「西の聖職者」にわざと間違った解釈を付けた。そうして付けられた名称は、*Aamu*, *Emori*, *Erech*, *Urug*, *Amorite*, *Canaanite*, *Umma*, *Hyksos*, *Martu*, *Medoi*, *Mada* といったさまざまな形で、歴史を通じて秘かに知られている。これが、バ



図137 エジプトの神々（オシリスとアトゥン）の頭飾りは隆々たる男根。

ビロニア、エジプト、アテナイ、ローマの世襲支配者に種をまき、「西の帝国」、礎石^{そせき}、
「ヨーロッパのマントル」と公言することになった。

また、オシリスの金色の男根のシンボルと、それと類似した神話（ズールー族のクレド・ムトゥワの「神秘の首飾り」にある金色の男根の原型など）もある。オシリス（さまざまに文化で名称は違ってもオシリスに相当するもの）は「闇の者」（エジプトの神話ではセト）に殺され、その身体はたくさんの断片に切り刻まれたという。エジプトのイシスのような処女母が、男根以外の全ての断片を見つけ出し、男根は金色のものに置き換えた。これは爬虫類人が人間の遺伝子に入り込んだときのことを象徴している。図137にオシリスとアトウンが男根の頭飾りをしている様子が描かれている。何ともおかしなペアルックだ。

ソダリス^秘、**サウド**^黒、**黒い貴族**^{専頭勢力}、**ソシアリス**^{フエビアン協会}、**ザドク派**^{監視者}、**メセー**^{救世主}、**サドカイ派**^{エツセネ派へ}

ソダリス（秘密）の聖職者は、何千年もの間、爬虫類人による奴隷化の進行に関わってきた。これも、Zenda（ペルシャ語）、Sauda（シリア語）、Soter（ギリシャ語。救世主の意）、Sodi（ヘブライ語）、Sodalist（ラテン語）とさまざまに名称で知られている。この Sauda が、

サウド家とサウデイ・アラビアの名称の本当の起源である。「イスラム」のサウド王家の専制君主がいつもロスチャイルドとその陰謀団に従順な理由もここにあり。saudaは「黒い」という意味であり、イタリアから登場したヨーロッパの王族・貴族・金融一族（悪魔崇拜のメデイチ家などの寡頭勢力を含む）を指す「黒い貴族」という言葉の由来もここにある。

ソダリストは「ソシアリスト（社会主義者）」ともよく似ているが、社会主義という政治制度は、世界全体で権力を集中化させるために利用されており、その最大の推進者の一つがフェビアン協会である。また、ソダリストはザドクの系統に属し、一部の古代伝承によると、監視者（蛇人種）の血筋である「ザドク派」として知られていた。イギリス王の戴冠式にはヘンデルの合唱曲『司祭ザドク』が使われるが、これは「ソロモン王」に油を塗った（選定した）と言われるヘブライの司祭長に因んだ曲名である。ザドクという名は、祭司王「メルチ・ザデク」にも見受けられるが、アラビア語で「爬虫類」を意味する *Zakhat* に関係している。先述の通り、イギリスの戴冠式で今でも使用されている油は、古代エジプトのファラオの戴冠式の大きな特徴だったナイル川のワニの「メセー」の脂肪を象徴している。エジプトの儀式上の称号「モシエ」は、「ナイル川のワニの脂肪（油）を塗られた者」という意味である。「メセー」から、ユダヤの伝説でいつかやってくることになっている「救世主」の言葉ができた。救世主とは、ワニの脂肪を塗られた者であり、次のファラオであり、蛇人種

を代理して地球を統治する者である。サバクは、ザドクという語のつながりをこう述べている。

Zadok という称号は、サンスクリット語の sadhu (聖人) という称号と一致する。イスラム教の伝統では、Zadok あるいは Zadik は、Sadat (主人たち、または、聖なる預言者の子孫) と翻訳されている。秘教的には、Zadik という語は、ユダヤの王の隠れた血筋を示すときに使う。この証拠は、古代セム語に暗号化されて存在している。

Zadok あるいは Zadik は、Sed-Hyk (狩りをする王) と同等の Sod-Hyk (隠れた王) の回文である。Hyk (カナンの言葉で統治者の意) は、Hyksos 「アイク註…ある時代にエジプトを支配した「羊飼ひ」もしくは「外国王」のことで、私の以前の著作で蛇の血筋との関係を指摘している」の指小辞である。Zadik もしくは Sed-Hyk の伝播は、モーゼのソダリストの聖職者にさかのぼるサドカイ派の系統を通じている。サドカイ派 (ソダリスト) が、「秘密」の血筋を通じて受け継がれた「サウジ」、「サウダ」(黒い貴族) の背後にいる。

また、サバクは、ザドク (ザダイク) 派とサドカイ派が、いかにアラビアのザンダイク派

と同一の世界観を持っていたかを示している。Zendaは、ザドク派とソダリストの別名だった。名前は違うが、同じチームにいた。サバクによると、初期の新約聖書の記述には、「イエス」とその「兄弟のジエイムズ」をザダイク派（サドカイ派）と認めていた。これは我々の関心を、聖書に書かれているパレスチナ一派であるエッセネ派（『死海文書』を作ったとされる）に向けることにもなる。彼らは自らのことを、まさに「ザドクの息子」、「正義の息子」であると称していた。

カプトル^{頭蓋骨}で**通底**——**キャピトル・ヒル**^{米国会議事堂}、**バフオメット**^{離山羊の頭}、**ゴルゴダ**^{イエスの磔}、**モサド**^{子供に危害}、**ナチス**^{ユダヤ教司祭}

イルミナティ・ネットワークの主なシンボルに頭蓋骨^{ずがいこつ}がある。あるいは、両ブツシユ大統領など米国の有力者を多く輩出したエール大学の「スカル&ボーンズ協会」が使用していることで有名なのが、頭蓋骨と骨である。頭蓋骨（および身体の骨）は、蛇の「神々」のシンボルであり、彼らが行っている儀式の生け贄を象徴している。このシンボルは、政治と宗教（いづれも「頭蓋骨」の陰謀集団が支配している）の世界で使用されている。

米国のキャピトル・ヒル（国会議事堂）は、ローマでユピテル神に向けて神殿を建築したキャピトル・ヒルという地名に因んで名付けられた。「キャピトル」は、ラテン語の caput